公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（４）

国道226号岩本交差点改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

岩本麓遺跡

（指宿市岩本）

2015年３月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

序　文

この報告書は，国道226号岩本交差点の改良事業に伴い平成25年度に実施した指宿市岩本に所在する岩本麓遺跡の発掘調査の記録です。
調査の結果，縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世の各時代の遺物が出土し，多くの成果を収めました。

本報告書が，県民の皆様を始め多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

本報告書の刊行に当たり，本県の埋蔵文化財保護のためにご協力いただきました国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所，指宿市教育委員会，発掘作業員，整理作業員，その他関係者の皆様に心より厚く御礼申し上げます。

平成27年３月

公益財団法人　鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター長　　堂込　秀人

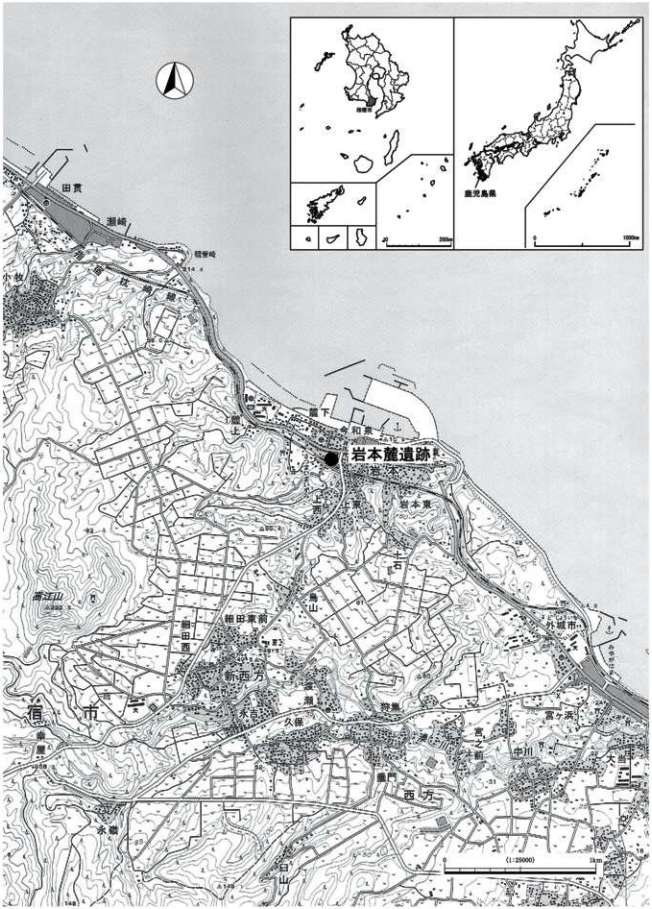
報告書抄録

ふりがな	いわもとふもといせき
書名	岩本麓遺跡
副書名	国道226号岩本交差点改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第４集
編著者名	吉岡康弘　黒木梨絵　中村有希　江神めぐみ
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号 TEL 0995-70-0574　FAX 0995-70-0576
発行年月日	2015年３月

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査起因
		市町村	遺跡番号					
岩本麓遺跡（いわもとふもといせき）	鹿児島県（かごしまけん） 指宿市（いぶすきし） 岩本（いわもと）	46210	210-137	31° 17′ 09″	130° 36′ 15″	本調査 2013.08.19 ～ 2013.08.29	440.19	国道226号岩本交差点改良事業に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩本麓遺跡	散布地	縄文時代後・晩期		上加世田式，入佐式土器，黒川式土器，磨石，敲石，石皿，打製石鏃	
		弥生時代		刻目突帯文土器，高橋式土器，入来Ⅱ式土器	
		古墳時代		土製品	
		古代・中世		須恵器，土師器，陶磁器，瓦質土器	
		時期不明	溝状遺構１条 ピット22基		

要約	岩本麓遺跡は，縄文時代後・晩期～近世相当の遺跡である。縄文後・晩期～弥生時代の包含層が確認され，各時代の遺物が出土した。縄文時代後・晩期は，黒川式を主体とし，それに伴うと思われる打製石鏃・打製石斧・礫石器等が出土している。弥生時代は早・前期～中期前半の土器が出土した。特筆すべき遺物として，Ⅱ層出土の古墳時代相当期の土製品がある。古代～中世にかけても遺物が出土しており，当遺跡が断片的ではあるが継続して使用された立地であることが明らかになった。遺構は時期不明のピット群が検出された。


鹿児島県
田貫
瀬崎
鹿屋湾
小牧
鹿屋駅
和泉
岩本麓遺跡
上西
岩本東
古江
高須山
鳥山
細田西
細田東前
新西方
宝潮
狩集
宿市
永吉
久保
宮之前
富ケ浜
中川
大当
亀門
西方
赤崎
臼山
(1:25000)

岩本麓遺跡位置図

例　言

1　本書は，国道226号岩本籠交差点改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2　本遺跡は，鹿児島県指宿市岩本に所在する。
3　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが実施した。
4　発掘調査は，平成25年度に実施した。
5　整理・報告書作成事業は，平成26年度に実施した。
6　掲載遺物番号は通し番号であり，本文，挿図，表，図版の遺物番号は一致する。
7　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。
8　本書で用いたレベル数値は，工事計画図面による海抜絶対高である。
9　遺物注記等で用いた遺跡記号は「ＩＦ」である。
10　本書で使用した方位は，全て真北である。
11　発掘調査における実測図作成及び写真撮影は，調査担当者が行った。
12　遺構図，遺物分布図の作成及びトレースは，黒木梨絵が整理作業員の協力を得て行った。
13　出土遺物の実測・トレースは，黒木が整理作業員の協力を得て行った。
14　出土遺物の写真撮影は，吉岡康弘が行った。
15　本書の編集は吉岡が担当し，執筆者は以下のとおりである。
　第１章　吉岡
　第２章　中村，江神
　第３章　第１節～第３節　黒木
　第４章　吉岡，黒木
19　出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用を図る予定である。

本　文　目　次

序文
報告書抄録
遺跡位置図
例言

第１章　発掘調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至るまでの経緯 …… 1
　第２節　試掘調査 …… 1
　第３節　本調査 …… 1
　第４節　整理・報告書作成作業 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 2
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 2
第３章　調査の方法と成果 …… 5
　第１節　調査の方法 …… 5
　第２節　層序 …… 5
　第３節　調査の成果 …… 7
　　１　遺構 …… 7
　　２　遺物 …… 8
第４章　総括 …… 16
写真図版 …… 17

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡位置図 …… 3
第２図　西区北壁土層断面図 …… 5
第３図　調査区位置図 …… 6
第４図　東区溝状遺構検出状況図 …… 7
第５図　東区溝状遺構断面図 …… 7
第６図　西区ピット配置図 …… 7
第７図　西区遺物出土状況図 …… 8
第８図　縄文時代の土器(1) …… 9
第９図　縄文時代の土器(2) …… 10
第10図　縄文時代の石器(1) …… 11
第11図　縄文時代の石器(2) …… 12
第12図　弥生時代の土器 …… 14
第13図　古墳時代の土製品 …… 15
第14図　古代・中世の土器 …… 15

表 目 次

第１表　周辺遺跡一覧表 …… 4
第２表　基本層序 …… 5
第３表　縄文時代の土器(1)観察表 …… 9
第４表　縄文時代の土器(2)観察表 …… 10
第５表　縄文時代の石器観察表 …… 13
第６表　弥生時代の土器観察表 …… 15
第７表　古墳時代の土製品観察表 …… 15
第８表　古代・中世の土器観察表 …… 15

図 版 目 次

図版１ …… 17
①調査前風景　②土層断面　③溝状遺構検出状況　④溝状遺構完掘状況
⑤ピット群完掘状況　⑥・⑦遺物出土状況　⑧作業風景
図版２　縄文時代の土器 …… 18
図版３　縄文時代の石器 …… 19
図版４　弥生時代～中世の遺物 …… 20

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき，国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所（以下「鹿児島国道事務所」という。）は，国道226号岩本交差点改良事業を計画し，用地買収を進めたところ，鹿児島県教育庁文化財課（以下「県文化財課」という。）は，指宿市教育委員会から事業地内で土器片等を採集し，近世の麓集落という地域において必要な遺跡であるとの情報を得た。

そこで，県文化財課は鹿児島国道事務所と協議し，平成23年11月に試掘調査を実施し，遺跡の存在が明らかとなった。また，平成24年11月に国道拡幅に伴う個人住宅移転の立会調査を実施し，遺物の出土を確認した。

これを受けて，岩本麓遺跡の調査は，県文化財課から委託を受けた公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが，平成25年度に本調査を平成25年８月19日から８月29日まで実施した。

第２節　試掘調査

試掘調査は，平成23年11月25日と平成24年７月９日に実施した。両調査ともトレンチを２箇所設定し重機を使用して掘り下げた。

調査体制（平成23年度）

事業主体　国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調 査 者　鹿児島県教育庁文化財課
　　文化財主事　中村和美
立 会 者　国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所
　　指宿維持出張所　技術係長　井上晃司
調査協力者　指宿市教育委員会　主　査　鎌田洋昭

調査体制（平成24年度）

事業主体　国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調 査 者　鹿児島県教育庁文化財課
　　文化財主事　中村和美
立 会 者　国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所
　　指宿維持出張所　管理係長　吉田信也
調査協力者　指宿市教育委員会　主　査　鎌田洋昭

第３節　本調査

本調査は平成25年８月19日～平成25年８月29日の期間実施した。調査体制の詳細については以下のとおりである。

調査体制

事業主体　国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
　　センター長　冨田　逸郎
調査企画　〃　総務課長兼総務係長　山方　直幸
　　〃　調査課長　鶴田　静彦
　　〃　調査第二係長　寺原　徹
調査担当　〃　調査第二係長　寺原　徹
　　〃　文化財専門員　藤島伸一郎
　　〃　文化財調査員　黒木　梨絵
事務担当　〃　総務課事業推進員　川崎　麻衣

調査の経過（日誌抄より）

８月19日　東区表土剥ぎ。溝状遺構検出。
８月23日　東区溝状遺構実測，写真撮影。西区遺物取上。
８月26日　西区ピット検出。土器取上。
８月28日　西区Ⅳ層遺物出土状況写真撮影。
８月29日　西区ピット実測。埋め戻し。調査終了。

第４節　整理・報告書作成作業

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，平成26年11月に埋蔵文化財調査センター第二整理作業所で実施した。調査体制は以下のとおりである。

作成体制

事業主体　国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所
作成主体　鹿児島県教育委員会
企画調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
　　センター長　堂込　秀人
調査企画　〃　総務課長兼係長　山方　直幸
　　〃　調査課長　八木澤一郎
　　〃　調査第三係長　宗岡　克英
作成担当　〃　文化財専門員　吉岡　康弘
　　〃　文化財調査員　中村　有希
　　〃　〃　江神めぐみ
事務担当　〃　総務課事業推進員　川崎　麻衣
報告書作成指導委員会
　　平成26年11月25日（火）調査課長ほか５名
報告書作成検討委員会
　　平成26年11月26日（水）センター長ほか５名

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

岩本麓遺跡は鹿児島県指宿市岩本に所在する。遺跡の所在する指宿市は，九州本土薩摩半島の南東部に位置している。指宿市街地は東側から南側の鹿児島湾へ開き，西側から北側に山が迫る地形をなしており，海岸へ向かって西から東へゆるやかに下降する扇状地上にある。調査区から北は鹿児島湾が広がり，今和泉漁港など海沿いに面した立地である。遺跡を北西から南東方向に横切るように国道226号が通り，南西には薩摩今和泉駅がある。付近には今和泉島津家墓地や屋敷跡の石垣があり，江戸時代の史跡が点在している。

また，指宿枕崎線を境にして西側には今和泉島津家の領地で，今和泉郷の郷社である豊玉媛神社が祀られている。神社の山裾の先は広く穀倉地帯が広がり豊かな水田地帯となっている。

指宿市の地形は，山地・台地・平地・湖沼の大きく４つに区分される。中でも九州最大のカルデラ湖である池田湖は，約5700年（較正年代6300年）前に活動し，その噴出物は，厚く指宿地方を覆い，指宿地方の地形形成要因となっている。また，指宿市開聞町にはトニコロイデ型の火山として有名な開聞岳がある。開聞岳の噴火活動は約4500年前頃から始まり，固結した火山灰に覆われた指宿地方特有の地形が形成されている。なお，開聞岳起源の噴出物堆積層は，通称，黄ゴラ，暗紫ゴラ，青ゴラ，紫コラなどの噴出物が確認されている。指宿周辺ではほかにも阿多カルデラ・鰻池などの古い火口があり，国指定史跡である指宿橋牟礼川遺跡は開聞岳噴火による災害を受けた火山災害遺跡としても知られている。

第２節　歴史的環境

指宿市における発掘調査は，1918年（大正７年）に濱田耕作（京都帝国大学教授）や長谷部言人（東北帝国大学教授）による橋牟礼川遺跡の学術調査に端を発する。

ただし，「橋牟礼川遺跡」の名称は，1973年（昭和48年）の調査以降用いられており，現在は，1924年（大正13年）に国指定史跡となった「指宿橋牟礼川遺物包含地」を含む一連の遺跡を総称して「橋牟礼川遺跡」と呼んでいる。

この濱田耕作らの学術調査において，火山灰を挟んで上層に弥生時代以降の土器，下層に縄文土器を確認し，縄文土器（当時は「アイヌ式土器」と呼ばれていた。）が弥生時代よりも古い時代の土器であることが実証され，火山灰噴出物を考古学の時代区分に取り入れる層位学が確立していくきっかけとなった。

指宿市は，火山活動が活発であった地域であるため，考古学のみならず，関連諸科学の視点からも調査を行うことができ，その成果の意義は大きいものである。

以下，本遺跡周辺の遺跡について，述べることとする。

旧石器時代

小牧３Ａ遺跡は，当時，南部九州では発見事例の少なかった剥片尖頭器，三稜尖頭器，ナイフ形石器，台形石器，スクレイパー等が多く出土しており，南部九州における細石刃文化期以前の後期旧石器時代の代表的な遺跡である。

縄文時代

岩本遺跡は，早期の岩本式土器の標識遺跡である。岩本式土器は，貝殻円筒形土器の最古形態として評価されており，ベンガラで赤色に塗彩するものもある。隆帯文土器も同時に出土した。大園原遺跡では，高床の掘立柱建物と思われる線刻画が描かれた土器片が発見されている。ヘラ状の工具で草葺屋根や柱，床を表現したと思われる線で構成されており，西日本最古級の建物絵画であると考えられている。

弥生時代

横瀬遺跡では，弥生時代後期の住居跡が12基検出され，そのうち１基の花弁型住居跡の埋土中から朝鮮半島製と考えられる破鏡「変形渦文鏡」が出土している。中尾迫遺跡では，直径約１ｍ，深さ20cm程度の土器焼成遺構が発見されている。近くには，粘土を採掘した痕跡があり，炭化物と受熱している粘土塊が確認されている。

古墳時代

鍛冶遺構が発見された遺跡として知られている尾長谷迫遺跡は，住居内部中央部に鍛冶炉が設けられ，鉄滓，金床石，砥石，高坏の脚部を転用した鞴羽口等が出土した。日常的に使用していたと思われる甕や壺等の土器も出土している。宮之前遺跡では，住居跡が８基検出され，なかでも方形のプランの中に円形の落ち込みをもつ竪穴式住居跡と，方形の落ち込みを持つ住居跡が１基検出された。遺物は成川式土器と須恵器が主な出土遺物である。土器のほか，鉄鏃や青銅製の環等の金属製品が出土している。特に成川遺跡と同類の鉄鏃が出土したことが注目できる。

古代～近代

中島ノ下遺跡で「中」の文字が刻書された10世紀代の土師器の坏が出土した。また，885年の開聞岳噴火に伴う可能性のある液状化現象の痕跡も見つかり，注目され

た。松尾城（指宿城）跡は，明治初年から翌年にかけて行われた廃仏毀釈の痕跡と思われる五輪塔や仏像等の散布地がある。鎌倉時代から1615年（元和元年）の江戸幕府が発令した一国一城令で廃城になるまで，山城・海城の両方の性格をもった山城として活用された。市指定文化財今和泉島津家墓地は，今和泉島津家初代の忠郷から，６代目忠冬までの当主と奥方が奉られている。

参考文献

指宿市教育委員会1981「宮之前遺跡」指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書（５）

指宿市教育委員会1982「横瀬遺跡」指宿市埋蔵文化財調査報告書（６）

指宿市教育委員会1986「尾長谷迫遺跡」指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書（７）

指宿市教育委員会1990「中島ノ下遺跡」指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書（８）

指宿市教育委員会1992「橋牟礼川遺跡Ⅲ」指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書（10）

指宿市教育委員会1994「橋牟礼川遺跡Ⅵ（概報）」指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書（16）

指宿市教育委員会2001「水迫遺跡Ⅰ」指宿市埋蔵文化財調査報告書（34）

指宿市教育委員会2002「指宿市考古博物館・時遊館ＣＯＣＯはしむれ　第８回企画展示図録」

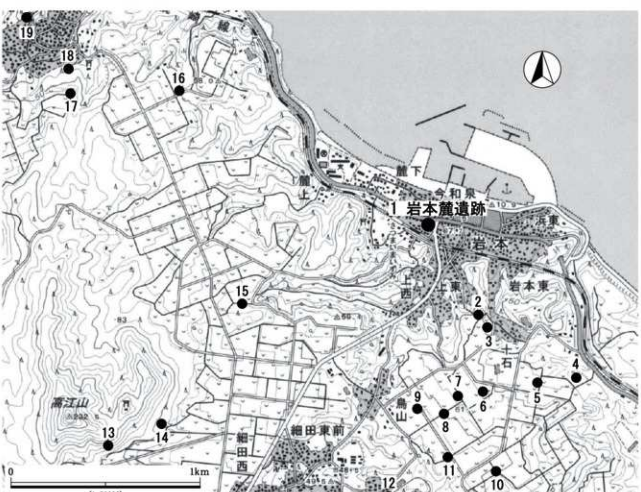
指宿市教育委員会2005「中尾迫遺跡」指宿市教育委員会（38）

鹿児島県教育委員会2005『先史・古代の鹿児島』資料編

鹿児島県立埋蔵文化財センター1996「小牧３Ａ遺跡・岩本遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター（15）

鹿児島県立埋蔵文化財センター2009「南摺ヶ浜遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター（144）

京都帝国大学1921「薩摩国指宿郡指宿村土器包含層調査報告」京都帝国大学文学部考古学研究報告（６）



第１図　周辺遺跡位置図

第１表　周辺遺跡一覧表

※太字は，本遺跡

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所　在　地	種類	時　代	地形	遺物等	備　考
1	**210**	**137**	**岩本麓**	**指宿市岩本**	**散布地**	**縄文後～中世**	**台地**	**本報告書掲載**	**平成23・24年 試掘調査実施 平成25年 本調査実施**
2	210	78	今田平	指宿市新西方字今田平	散布地	縄文(早)	丘陵	土器，剥片，礫	昭和52年 分布調査実施
3	210	79	十石	指宿市新西方字十石	散布地	縄文	丘陵	剥片，砕片	昭和52年 分布調査実施
4	210	83	榎木迫	指宿市新西方榎木迫	散布地	縄文	丘陵	土器	昭和52年 分布調査実施
5	210	82	十石出口	指宿市新西方字十石出口	散布地	古墳	丘陵	成川式土器，剥片	昭和52年 分布調査実施
6	210	81	十石平	指宿市新西方字十石平	散布地	古墳	丘陵	成川式土器	昭和52年 分布調査実施
7	210	80	鳥添	指宿市新西方字鳥添	散布地	縄文	丘陵	縄文土器	昭和52年 分布調査実施
8	210	77	中迫	指宿市新西方字中迫	散布地	縄文	丘陵	剥片，円礫	昭和52年 分布調査実施
9	210	6	西原迫	指宿市新西方字西原迫	散布地	縄文(晩)，弥生(前・中)，古墳	台地	縄文土器，弥生土器，成川式土器	昭和54年 本調査実施
10	210	10	早馬迫	指宿市新西方字早馬迫	散布地	縄文(晩)，弥生(前・中)，古墳	台地	弥生土器	昭和54年 本調査実施
11	210	5	西原道畑	指宿市新西方字西原道畑	散布地	縄文(早)，古墳	台地	塞ノ神式土器	昭和54年 本調査実施
12	210	9	渡瀬	指宿市新西方渡瀬	散布地	縄文(中・後)	台地	阿高式土器，指宿式土器，岩崎上層式土器，市来式土器，石皿	・日本考古学会報告 ・昭和27年度考古学紀要４号 ・指宿市誌
13	210	69	高江山麓	指宿市岩本高江口	散布地	弥生，古墳	山地		
14	210	68	宮尻平	指宿市新西方細田西宮ノ尻平	散布地	古墳，歴史	山地		
15	210	498	鳥山	指宿市新西方鳥山	散布地	縄文	台地	土師器，須恵器，石斧，敲石，打製石斧	指宿市誌
16	210	4	岩本	指宿市小牧	散布地	旧石器，縄文(早・前・晩)，弥生	台地	前平式土器	昭和52年 本調査実施
17	210	3	小久保	指宿市小牧字小久保	散布地	旧石器，縄文(早・前・晩)，弥生	台地	小型ナイフ形石器，ナイフ形石器，剥片，矢頭器	昭和53年 本調査実施
18	210	76	慈雲山永泉寺寿福院跡	指宿市小牧戸迫	散布地	近世	—		指宿市誌
19	210	75	北迫	指宿市小牧北迫	散布地	縄文(後)	台地	市来式土器，指宿式土器	指宿市誌

遺跡台帳番号は，現在，鹿児島県立埋蔵文化財センターのデータベースに収録されている番号を掲載してある。

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

１　調査区の設定（第３図）

調査を実施するにあたり，調査区を岩本篭交差点東側と西側に分け，それぞれ「東区」・「西区」とした。

調査範囲は，両区とも歩行者の安全面を考慮し，歩道を確保するため，歩道部分を除いた拡幅予定地とした。

２　調査の方法

試掘調査及び，Ⅴ層以下の先行調査等の結果から，Ⅴ層（池田カルデラ火山灰層）上面までを調査の対象とした。本調査では，表土を重機で除去した後，人力で掘り下げた。ただし，東区では表土剥ぎを行なったところ，大部分がⅤ層まで削平を受けており，東区北側のみ包含層が残存していた。

遺構の調査は，移植ごて等の遺構に適した道具を用いて慎重に調査し，実測・写真撮影等を行なった。

遺構の認定については，埋土の状況や床面の状態，出土した遺物等をもとに担当者で検討し，総合的に判断した。

遺物は，平板を用いて出土状況を記録し，取り上げを行なった。ただし，遺構内遺物は埋土内一括で，土器の細片や一般礫は調査区ごとに一括で取り上げた。

３　整理・報告書作成作業の方法及び内容

遺物の水洗いは，土器や陶磁器，礫石器はブラシを用いた。その際，遺物に付着している重要な情報を除去することがないように注意しながら洗浄を行なった。剥片石器などは超音波洗浄機を使用した。

遺物の注記は，水洗い終了後順次行なった。注記を行なう際，薬品を使用するため換気に注意しながら手作業で進めた。これまで刊行された遺跡の記号と重複しないようにデータを管理している鹿児島県立埋蔵文化財センター南の縄文調査室に確認をとり，「ＩＦ」とした。

遺物の接合は，調査区別に遺物の抽出・分類を行ない，その後，接合を行なった。

土層断面や遺構のトレースについては，下図を作成し，下図の点検・修正後，デジタルトレースを行った。遺物の実測・トレースについては，実測図の点検・修正後，トレースを行なった。また，遺物によっては，拓本をとり，図化に努めた。

第２節　層序

東区は，大部分がⅤ層（池田カルデラ火山灰層）上面まで削平を受けていたことから，土層の堆積が分かる西区の層序を基本層序とした（第２表）。

Ⅰ層は表土で，層厚が約20cmである。宅地跡のため砕石を多く含んでいた。

Ⅱ層・Ⅲ層は茶褐色土である。Ⅱ層は，直径約３mmの微細なオレンジパミスを含み，層厚が約25cmである。Ⅲ層はⅡ層よりやや黒く，しまりがあり，層厚が約20cmである。縄文時代後期～弥生時代の遺物包含層である。

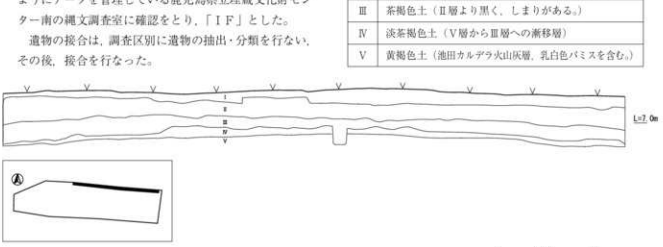
Ⅳ層は淡茶褐色土で，Ⅴ層からⅢ層への漸移層である。遺物は出土したが包含層ではない。

Ⅴ層は黄褐色土（池田カルデラ火山灰）である。開聞岳起源の池田カルデラ噴出物で，乳白色パミスを含む。無遺物層である。

Ⅴ層以下については，東区において，下層確認トレンチを設定し，重機で無遺物層のⅤ層を除去しようとしたが，２ｍ以上堆積していることが判明したので，安全面を考慮し，調査対象をⅤ層上面までとした。

第２表　基本層序

層	色　調　等
Ⅰ	表土（砕石を多く含む。）
Ⅱ	茶褐色土（直径約３mmのオレンジパミスを含む。）
Ⅲ	茶褐色土（Ⅱ層より黒く，しまりがある。）
Ⅳ	淡茶褐色土（Ⅴ層からⅢ層への漸移層）
Ⅴ	黄褐色土（池田カルデラ火山灰層，乳白色パミスを含む。）



第２図　西区北壁土層断面図

第３図　調査区位置図

第３節　調査の成果

１　遺構

遺構は，東区で溝状遺構１条，西区でピット22基を検出した。しかし，遺物包含層が残存していた西区では，縄文時代後・晩期，弥生時代の遺構は確認できなかった。

溝状遺構

東区北側，Ｖ層上面で１条検出した。東西方向へ延びており，調査区外へと続く。検出した規模は長軸10.7m，短軸0.5～1.3mを測る。検出面からの深さは，東側が約35～50cm，西側が約60cmを測る。断面形は，底面が凹凸を成しているため「W」に近い形をしている。

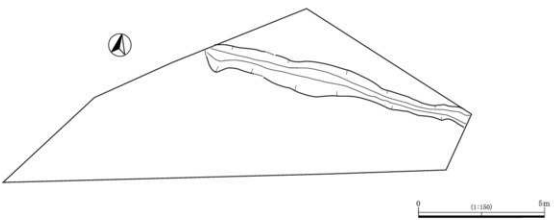
埋土は，撹乱しており明確な埋土堆積は確認できなかったが，灰黄褐色土，暗褐色土，黒褐色土，明黄褐色土（池田火山灰）に分層できた（第５図）。

人為的な溝というよりは，自然流路の可能性が高いと考える。

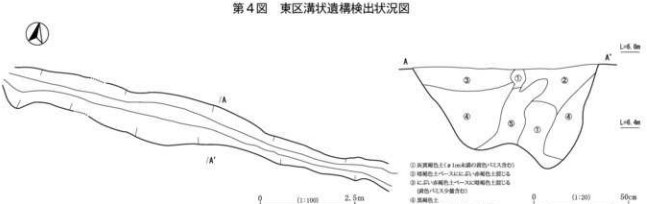
ピット

西区のＶ層上面で22基検出したが，時期は不明である。検出したピットはすべて径が約20～30cmのもので，検出面からの深さは約10～20cmと浅い。

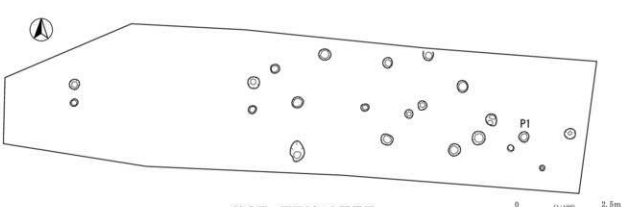
遺物が出土したピットは１基で（第６図　Ｐ１），礎石と思われる礫が出土したが，近世以降のものと思われる。



第４図　東区溝状遺構検出状況図



第５図　東区溝状遺構断面図



第６図　西区ピット配置図

2　遺物

出土遺物は主として，西区のⅡ～Ⅲ層中から出土した（第７図）。縄文時代後期～弥生時代中期に相当する遺物が混在して出土した。遺物の出土レベル等で，時期差を把握することはできなかった。

(1) 縄文時代の遺物

ア　土器（第８・９図　１～30）

１～21は縄文時代後・晩期に相当する土器である。１～10は深鉢の口縁部である。１～３は口縁部が短く，「くの字」状に屈曲し，１条または２条の沈線が施される。縄文時代後期の上加世田式土器に比定できる。いずれも内外面の器面調整はナデである。４～７は口縁文様帯に明瞭な沈線が施される。口縁部文様帯の段が明瞭であり，文様帯の幅が狭い。８～10は，口縁部は直線状に延び，端部がやや先細りになる。８は丁寧なヨコナデ，９・10は外面に貝殻条痕で器面調整される。11・12はリボン状の突起部分である。11は指頭圧痕を残し，突起を内面が凹む。

13～15は胴部片である。13は内外面ともに明瞭な貝殻条痕を残す。胎土には火山ガラスを多く含む。また，外面には薄く煤が付着している。14・15は半粗半精製の深鉢である。外面は横位のミガキ，内面は貝殻条痕であるが，15の内面は貝殻条痕後にミガキを施す。いずれも屈曲部の粘土帯接合痕が内面に確認できる。15の上位には煤が厚く付着する。

16～21は，深鉢の底部片である。いずれも平底だが，16～18のようにやや円盤状に厚くなるものもある。

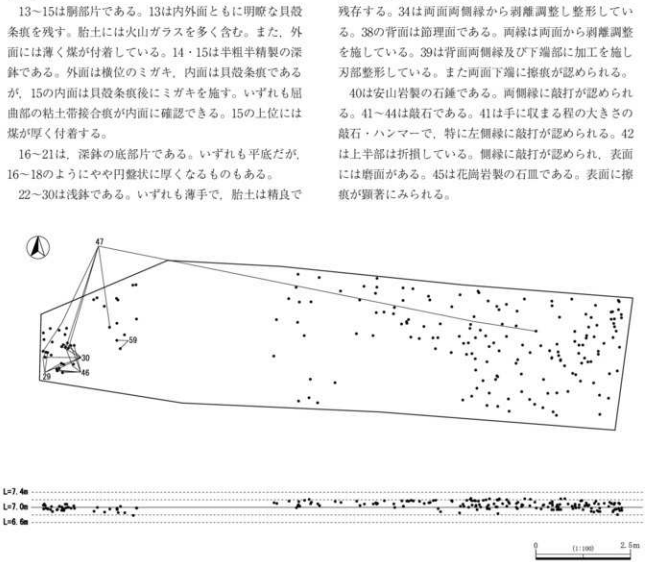
22～30は浅鉢である。いずれも薄手で，胎土は精良である。丁寧なミガキで調整される。22～25は口縁部が短く，１条沈線をもつ。26は口縁部から胴部までがＳ字状に屈曲する。27･28は胴部である。27は肩部で段をもつ。28は外面のみ丹塗が施されており，胎土には火山ガラスを多く含む。29と30は同一個体と思われる。器壁が薄く，胴部で屈曲する。内外面ともに貝殻条痕後にミガキを施し，磨り消しており，口唇部までミガキを施す。外面には煤が薄く付着している。

イ　石器（第10・11図　31～45）

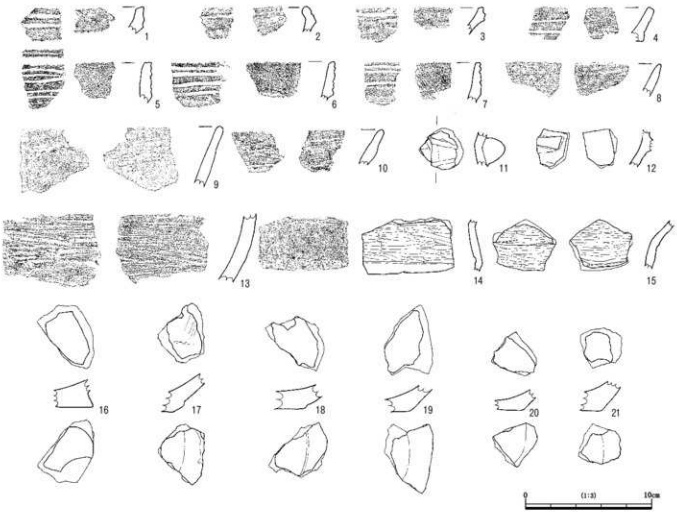
31は安山岩製の打製石鍬である。正三角形を成し，両面縁のみ剥離調整を施している。32は安山岩製の石錐である。縦長剥片を素材とし，左側を折断後右側縁に両面から剥離調整を施し，錐状を成している。33は腰岳産黒曜石製の調整剥片である。背面右側及び左側下端部は礫面である。

34～39は打製石斧である。34･36はホルンフェルス製，35・37～39は頁岩製である。斑紋状の風化が著しい。34～36は頭部のみ，37・38は中間部のみ，39は刃部のみ残存する。34は両面両側縁から剥離調整し整形している。38の背面は節理面である。両縁は両面から剥離調整を施している。39は背面両側縁及び下端部に加工を施し刃部整形している。また両面下端に擦痕が認められる。

40は安山岩製の石鏃である。両側縁に敲打が認められる。41～44は敲石である。41は手に収まる程の大きさの敲石・ハンマーで，特に左側縁に敲打が認められる。42は上半部は折損している。側縁に敲打が認められ，表面には磨面がある。45は花崗岩製の石皿である。表面に擦痕が顕著にみられる。



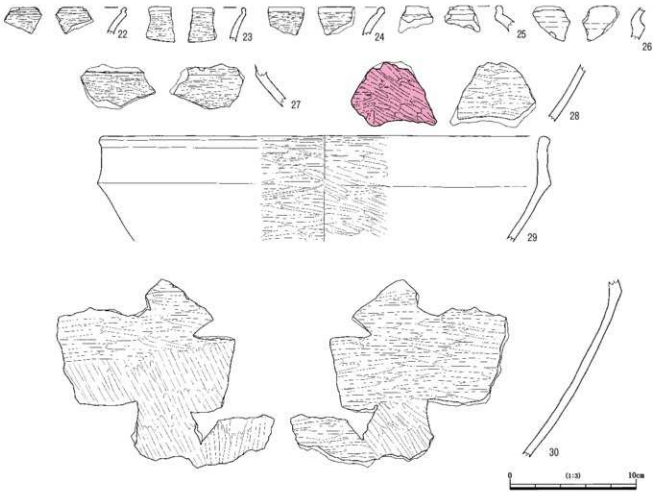
第７図　西区遺物出土状況図



第８図　縄文時代の土器（１）

第３表　縄文時代の土器（１）観察表

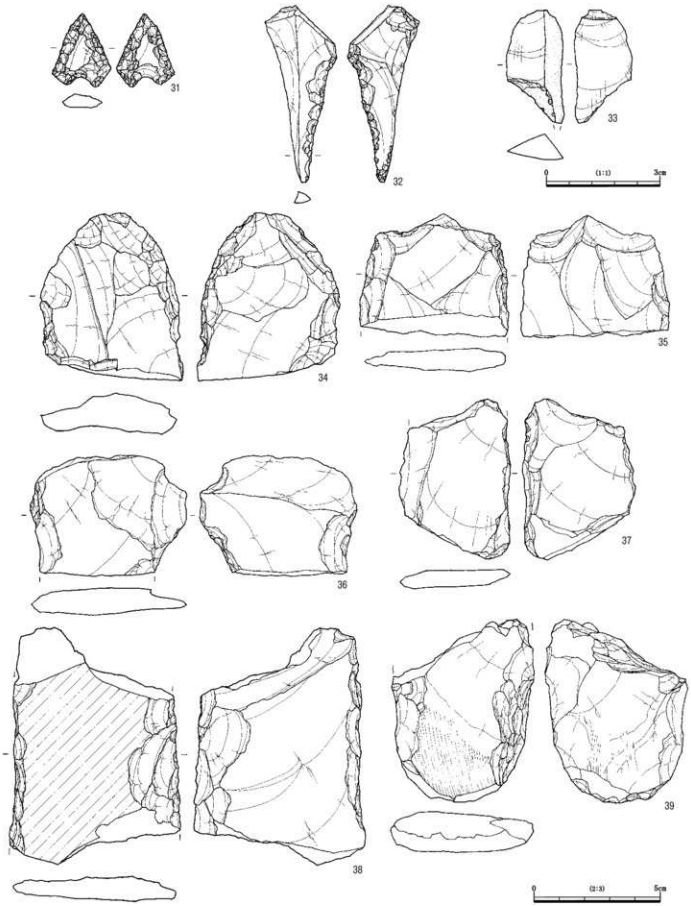
挿図番号	掲載番号	区	層	取上番号	器種	部位	器面調整		色調		法量（cm）			胎土				備考
							外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	他	
8	1	西	－	219	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	暗褐色	暗褐色	－	－	－	○	○	○	黒・白色鉱物	
	2	西	Ⅱ	一括	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	褐色	－	－	－	○	○	○	黒・白色鉱物	
	3	西	Ⅱ	一括	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	暗灰黄色	にぶい黄橙色	－	－	－	○	○		黒・白色鉱物	
	4	西	－	一括	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	暗灰黄色	灰黄褐色	－	－	－	○	○	○	黒・白色鉱物	
	5	西	Ⅱ	一括	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	にぶい褐色	－	－	－	○	○	○	黒・白色鉱物	
	6	西	－	一括	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい橙色	黄褐色	－	－	－	○	○	○	黒・白色鉱物	
	7	西	－	227	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	明赤褐色	灰黄褐色	－	－	－	○	○	○	黒・白色鉱物	
	8	西	－	288	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	灰褐色	明褐色	－	－	－	○	○	○	黒・白色鉱物	
	9	西	Ⅱ	99	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ	ナデ	黄灰色	灰黄色	－	－	－	○	○	○	黒・白色鉱物・小礫	
	10	西	Ⅱ	一括	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕→ナデ	黒色	にぶい褐色	－	－	－	○	○	○	黒・白色鉱物	
	11	西	－	一括	深鉢	つまみ部	ナデ	ナデ	黒褐色	にぶい黄橙色	－	－	－	○	○	○	黒・白色鉱物	
	12	西	Ⅱ	一括	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	－	－	－	○	○	○	黒・白色鉱物	
	13	西	－	173	深鉢	胴部	貝殻条痕	貝殻条痕	黒褐色	にぶい黄橙色	－	－	－	○	○	○	黒・白色鉱物・火山ガラス	
	14	西	Ⅱ	171…甚	深鉢	胴部	ミガキ	貝殻条痕	暗灰褐色	浅黄色	－	－	－	○	○	○	黒・白色鉱物小礫	
	15	西	－	292	深鉢	胴部	ミガキ	貝殻条痕	黒色	黒褐色	－	－	－	○	○		黒・白色鉱物	
	16	西	－	一括	深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	－	－	－	○	○		黒・白色鉱物小礫	
	17	西	－	164	深鉢	底部	ナデ	ナデ	明赤褐色	にぶい黄褐色	－	－	－	○	○	○	黒・白色鉱物小礫	
	18	西	－	268	深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい橙色	灰黄褐色	－	－	－	○	○	○	黒・白色鉱物小礫	
	19	西	Ⅱ	一括	深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい褐色	－	－	－	○	○		黒・白色鉱物小礫・ob細片	
	20	西	－	14	深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	－	－	－	○	○		黒・白色鉱物小礫・ob細片	
	21	西	－	33	深鉢	底部	ナデ	ナデ	赤褐色	褐灰色	－	－	－	○	○		黒・白色鉱物小礫・ob細片	



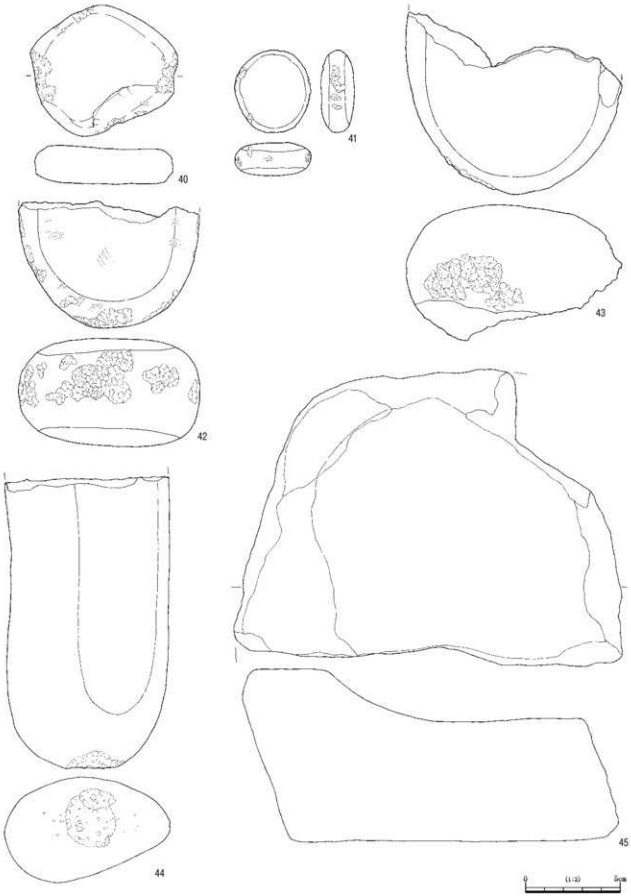
第９図　縄文時代の土器（２）

第４表　縄文時代の土器（２）観察表

挿図番号	掲載番号	区	層	取上番号	器種	部位	器面調整		色調		法量（cm）			胎土				備考
							外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	他	
9	22	西	Ⅱ	一括	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	暗褐色	灰褐色	－	－	－	○	○	○	黒・白色鉱物	
	23	西	－	一括	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	明褐色	黒褐色	－	－	－	○	○		黒・白色鉱物	
	24	西	Ⅱ	一括	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	灰黄褐色	黒褐色	－	－	－	○	○	－	黒・白色鉱物 火山ガラス	
	25	西	Ⅱ	一括	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	－	－	－	○	○	－	黒・白色鉱物	
	26	西	Ⅱ	一括	浅鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	褐灰色	－	－	－	○	○	－	黒・白色鉱物	
	27	西	－	230	浅鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	暗灰黄色	黒褐色	－	－	－	○	○	○	黒・白色鉱物・ 黒雲母	
	28	西	Ⅱ	87	浅鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	明赤褐色	黒褐色	－	－	－	○	○	○	黒・白色鉱物 火山ガラス	丹彩
	29	西	Ⅱ	116・117・120・121一括	浅鉢	口縁部	貝殻条痕→ミガキ	貝殻条痕→ミガキ	黒色	黄灰色	35.2	－	－	○	○		黒・白色鉱物	
	30	西	Ⅱ	91・120・103・119・93・一括	浅鉢	胴部	貝殻条痕→ミガキ	貝殻条痕→ミガキ	黒色	黒色	－	－	－	○	○		黒・白色鉱物	



第10図　縄文時代の石器（1）



第11図　縄文時代の石器（2）

第５表　縄文時代の石器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	区	層	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
10	31	128	西	Ⅱ	石鏃	安山岩	1.96	1.52	0.39	1.01
	32	159	西	Ⅱ	石鏃	安山岩	4.67	1.89	1.09	4.62
	33	65	西	Ⅲ	調整剥片	黒曜石	2.99	1.51	1.79	2.06
	34	110	西	Ⅱ	打製石斧	ホルンフェルス	6.60	5.68	1.70	72.81
	35	264	西	Ⅲ	打製石斧	頁岩	4.83	5.89	1.01	31.52
	36	54	西	Ⅱ	打製石斧	ホルンフェルス	4.75	6.24	1.29	45.73
	37	221	西	Ⅲ	打製石斧	頁岩	6.38	4.43	0.75	26.69
	38	277	西	Ⅲ	打製石斧	頁岩	9.36	6.84	1.22	75.06
	39	202	西	Ⅲ	打製石斧	頁岩	7.24	5.66	1.98	68.12
11	40	184	西	Ⅱ	石錘	安山岩	6.90	7.83	2.27	179.30
	41	195	西	Ⅱ	ハンマー	安山岩	4.41	4.05	1.80	41.33
	42	172	西	Ⅲ	磨・敲石	安山岩	6.75	9.60	5.70	540.0
	43	262	西	Ⅲ	敲石	安山岩	9.71	11.38	7.20	660.0
	44	283	西	Ⅲ	敲石	多孔質安山岩	15.50	8.80	5.60	1160.0
	45	79	西	Ⅱ	石皿	花崗岩	16.00	20.6	9.5	3780.0

(2) 弥生時代の土器（第12図　46～63）

46～63は弥生時代に相当する土器である。46は２条突帯をもつ甕で，47の底部と同一個体と思われる。突帯には刻目はなく，貼付も歪で箇所によって断面形が異なる。内外面ともに貝殻条痕後，横位または縦位のミガキが施される。なお，47の内面は黒色化している。

48は窄胴形の甕で口唇部に直接刻目を刻んでおり，内面は板状の工具による縦位のナデがみられる。49は屈曲形の甕で，胴部屈曲部に幅広の刻目が施される。内外面には明瞭な貝殻条痕が残る。

50・51は壺の口縁部で，緩やかに外反する。50の外面には薄い丹塗りがみられる。52は胴部である。頸部への屈曲部に陵を成す。内面はナデ，外面は横方向のミガキを施す。53～58は壺の底部である。53は丹塗磨研で，底部まで内外面とも丹塗・ミガキが施される。57は内面に板状工具によるハケメ状のナデ痕がみられる。59は脚部である。小型の高杯か脚付鉢の可能性が考えられる。胎土は精良で，ミガキを丁寧に施す。

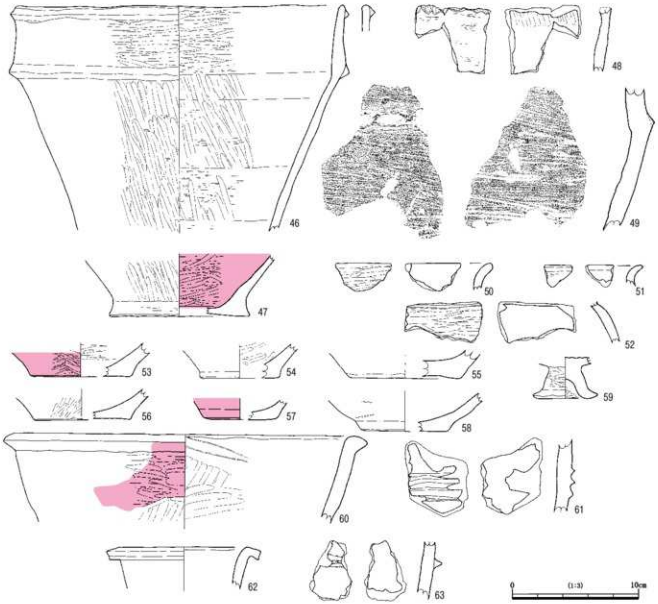
60～62は入来Ⅱ式に相当する。60は断面三角形の断面をもつ甕で，内面上位には線状の工具痕が残り，外面には煤が厚く付着する。61は甕の胴部片で，３条の突帯をもつ。62は壺の口縁部である。胎土は赤色鉱物を多く含む。63は甕の胴部で１条の刻目突帯をもつ。時期判別が明確でないため弥生土器として報告するが，古墳時代以降（成川式土器）の可能性もある。

(3) 古墳時代の土製品（第13図　64）

64は土製品と思われる。表面は半截竹管文が施され，側面は研磨による磨滅りから角を丸く成形している。表面も成形時に削られていることから，半截竹管文は一部分のみ良好に残存している。表面の色調は，にぶい黄褐色であり研磨された部分は黒色である。胎土は２㎜大の小礫や角閃石が多く含まれている。このような胎土で文様を施すものは，笹貫式土器の壺に貼付する突帯に類例が多くみられる。また，上側面は酸化していることから，土器製作時に破損したものを二次加工した可能性も考えられる。用途等は不明である。

(4) 古代・中世の土器（第14図　65～71）

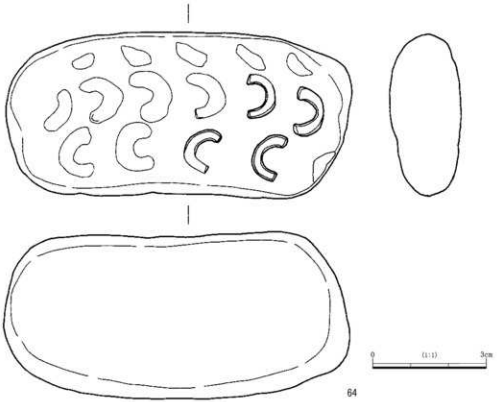
65は土師器の甕である。外反し，内面にはケズリ痕がみられる。66は土師器の椀である。高台は欠損しており，全体的に摩滅が著しい。67は須恵器の壺である。口縁部は打ち欠いており，内面には自然釉が厚くかかる。68は青花の碗である。胎土がにぶい橙色を呈し，釉薬は白濁している。璋州窯産と思われる。69は瓦質土器の鉢・もしくは硬質の土師器の坏と思われる。胎土は精良で小礫等は含まない。内面には回転ナデが確認できる。70・71は備前焼と思われる陶器であり，外面は暗赤褐色を呈す。70は胎土に小礫を多く含む。



第12図　弥生時代の土器

第6表　弥生時代の土器観察表

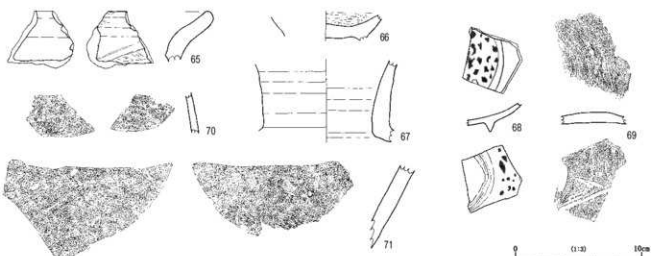
博図番号	遺構番号	区	層	取上番号	器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	色調 外面	色調 内面	法量 (cm) 口径	法量 (cm) 底径	法量 (cm) 器高	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃	胎土 他	備考
12	46	西	Ⅱ	92・128・198・208・123・107	甕	口縁～胴部	工具ナデ→ミガキ 下端工具痕跡→ミガキ	貝殺条痕→ミガキ	褐灰色	褐灰色	25.8	-	-	○	○	○	黒色・白色鉱物	
	47	西	Ⅱ	26・106・125・135・第一括	甕	底部	ミガキ	ミガキ	灰黄褐色	黒褐色	-	11.2	-	○	○	○	黒色・白色鉱物	
	48	東	-	溝一括	甕	口縁部	貝殺条痕	貝殺条痕→板状ナデ	にぶい黄橙色	暗灰黄色	-	-	-	○	○	○	黒・白色鉱物	
	49	西	Ⅱ	ガクラン一括	甕	胴部	貝殺条痕	貝殺条痕	にぶい橙色	にぶい黄橙色	-	-	-	○			火山ガラス・黒色鉱物	
	50	西	Ⅱ	一括	壺	口縁部	ナデ→ミガキ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	-	-	-	○	○	○	ob チップ・小礫・白色鉱物	丹塗
	51	西	-	一括	壺	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい褐色	灰黄褐色	-	-	-	○	○	○	黒・白色鉱物	
	52	西	Ⅱ	94	壺	胴部	ミガキ	ナデ	灰黄色	灰黄色	-	-	-	○	○	○	黒・白色鉱物	
	53	西	Ⅱ	89	壺	底部	ミガキ	ミガキ	にぶい赤褐色	灰黄褐色	-	8.0	-	○	○	○	黒・白・赤色鉱物	丹塗
	54	西	Ⅱ	一括	壺	底部	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙色	黒色	-	6.0	-	○	○	○	黒・白・赤色鉱物	
	55	西	Ⅱ	133	壺	底部	ナデ	ナデ	橙色	にぶい橙色	-	8.8	-	○	○	○	黒・白色鉱物 小礫	
	56	西	-	74	壺	底部	ナデ	ミガキ	赤褐色	暗灰黄色	-	7.7	-	○	○	○	火山ガラス・黒・白鉱物	
	57	西	Ⅱ	一括	小壺	底部	ナデ	ナデ	赤褐色	にぶい赤褐色	-	6.0	-	○	○	○	白色鉱物	
	58	西	-	181	壺	底部	ナデ	ナデ	褐色	黒褐色	-	6.6	-	○	○	○	黒・白色鉱物 火山ガラス	
	59	西	Ⅱ	82・83	高杯	脚部	ミガキ	ミガキ	にぶい橙色	灰色	-	4.2	-	○	○	○	黒・白色鉱物	
	60	西	-	60	甕	口縁部	ナデ→ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	27.2	-	-	○	○	○	黒色・白色鉱物	
	61	西	-	72	甕	胴部	ナデ	ナデ	浅黄色	浅黄色	-	-	-	○	○	○	黒・白色鉱物	
	62	西	Ⅱ	6	壺	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	10.4	-	-	○	○	○	黒色・赤色鉱物	
	63	西	Ⅱ	一括	甕	胴部	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	-	-	-	○	○	○	黒色・白色鉱物	



第13図　古墳時代の土製品

第７表　古墳時代の土製品観察表

挿図番号	掲載番号	区	層	取上番号	器種	部位	器面調整		色調		法量（cm）			胎土				備考
							外面	内面	外面	内面	長さ	幅	厚さ	石英	長石	角閃	他	
13	64	西	Ⅱ	一括	土製品	－	研磨	研磨	橙	浅黄橙	6.3	4.3	1.9	○	○	○		半截竹管文



第14図　古代・中世の土器

第８表　古代・中世の土器観察表

挿図番号	掲載番号	区	層	取上番号	器種	部位	器面調整		色調		法量（cm）			胎土				備考
							外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	他	
14	65	西	Ⅱ	279	甕	口縁部	ナデ	ナデ・ケズリ	褐灰色	にぶい褐色	－	－	－	○	○	○	赤色鉱物・obチップ	
	66	西	－	カクラン一括	椀	底部	回転ナデ	回転ナデ	橙色	橙色	－	－	－	○	○	○	黒・白色鉱物・火山ガラス	
	67	東	－	－	壺	胴部	回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰白色	－	－	－	○	○	○	黒・白色鉱物	
	68	西	Ⅱ	一括	椀	底部	透明釉	－	灰白色	にぶい橙色	－	－	－	－	－	－	白色鉱物	瑞州窯系
	69	西	－	64	鉢	底部	ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色	灰オリーブ色	－	－	－	○	○	○	黒・白色鉱物	
	70	西	－	一括	甕	胴部	ナデ	ナデ	暗赤褐色	灰黄褐色	－	－	－	○	○	－	小礫	備前？
	71	西	－	1	甕	胴部	ナデ	ナデ	暗赤褐色	灰黄褐色	－	－	－	○	○	－	小礫	備前？

第４章　総括

１　層位

岩本籠遺跡では，縄文時代晩期～弥生時代の包含層が確認されたが，付随する遺構は検出されなかったため，遺跡の性格については言及し難い。しかしながら，縄文晩期～弥生時代相当の遺物が包含層から出土していることから，一定期間この土地を使用していたと想定される。また，弥生時代以降の層は削平されていたが，弥生時代の包含層であるⅡ・Ⅲ層からは，開閉岳火山灰層（暗紫コラ：弥生時代中期）を確認できなかった。本調査で出土した遺物の多くが小片だったことを考慮すると，絶えず何らかの削平・撹乱を受けていた可能性が考えられる。表土・Ⅰ層上面からは，古墳時代以降の遺物が出土しており，本遺跡内における個人住宅建設に伴う工事立会（指宿市教育委員会2012）でも，弥生～近世の遺物が確認されている。このことから，継続して遺跡が存在していたと考えられる。なお，本遺跡と池田湖は約６㎞と非常に近接する立地であることから，Ⅴ層の池田火山灰が約２m以上堆積している。Ⅴ層以下は未掘であるため，縄文時代中期以前の状況は不明である。

２　遺物

縄文時代の遺物は，後・晩期相当の土器・石器が出土しており晩期が主体といえる。上加世田式土器が少数出土するが，多くは入佐～黒川式土器である。石鏃や打製石斧等も同時期のものと想定される。特に浅鉢は，器壁が薄く，胎土が精良で器面のミガキは丁寧な個体が多く，晩期から散見される丹塗磨研土器もみられる。

縄文晩期と連続して弥生時代早・前期では，刻目突帯文土器や壺，弥生中期前半の入来Ⅱ式がみられる。弥生時代早期～中期前半の近隣遺跡としては，西原迫遺跡・早馬迫遺跡や複数のピットが確認された中尾迫遺跡がある。また，前期末～中期では水迫遺跡，尾長谷迫遺跡，中期～後期後半の竪穴住居が確認された横瀬遺跡がある。

これらの遺跡でも，甕・壺・高坏といった器種構成が確認でき，本遺跡で確認された脚部（第12図59）は小型の高坏の可能性が高いと思われる。なお，西原迫遺跡では如意形口縁の前期甕も少量だが確認されている。

古墳時代相当の遺物は，土製品（第13図64）のみだが，個人住宅建設に伴う工事立会では成川式の小片が確認されている。この土製品の半載竹管文だが，笹貫式の幅広突帯にみられる特徴と一致する。胎土の色調もいわゆる指宿色で，胎土中には火山ガラスが目立たない。幅広突帯の再加工品とも考えられるが，厚さがやや薄く，貼り付け痕が確認できなかったことから，土製品として扱った。今後類例の増加を期待したい。なお，宮之前遺跡では笹貫式段階の住居跡が８基確認されている。

古代・中世の遺物は少量出土しているが，全体的にローリングを受けており，残存状態は良好ではない。

古代に相当する土師器の甕や椀も時期判別が可能なほど残存しておらず，僅かに器面調整が確認できる程度である。須恵器の壺（第14図67）は比較的良好で，意図的な打ち掻きがみられることから，再加工後使用された可能性も考えられる。宮ノ前遺跡では，８世紀後半～９世紀前半に相当する須恵器の食膳具（蓋・高台付の坏・平底の坏・皿など）や甕のほか，土師甕が少量出土している。

中世は瑞州窯系の青花，瓦質土器，国産陶器（備前？）が出土している。指宿市では中世遺跡の発掘事例が少ないが，尾長谷迫遺跡で，蓮弁文をもつ龍泉窯系青磁碗（14～15世紀）や芭蕉文をもつ青花碗（15～16世紀）等の中世遺物が出土している。また，今和泉島津家墓地家表採品にも青磁・白磁等の輸入陶磁器が確認されている。

近世相当の遺物は，未掲載だが近世陶磁器や薩摩焼の小片が表土中や撹乱から出土している。いずれも小片のため，形態的特徴を判別することは困難であった。個人宅地建設の工事立会や指宿市教育委員会による近接地の分布調査でも薩摩焼や近世陶磁器片が確認されている。

３　遺跡の残存状況等

本遺跡は国道226号線建設に伴う調査であり，調査終了後は工事が着工され，現在では国道226号線となっている。本調査で縄文後・晩期～弥生の包含層は残存していたため，遺跡範囲は広がる可能性が高い。国道や個人宅地が密集している立地であることから，今後も継続して分布調査を行い，遺跡域の把握に努める必要がある。また，池田火山灰層以下は未掘であり，今後も注意していくべき必要がある。

参考文献

指宿市教育委員会（1980）「鳥山調査区―西原迫畑遺跡・西原迫遺跡・早馬迫遺跡・その他―」指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書４

指宿市教育委員会（1981）「宮之前遺跡」指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書５

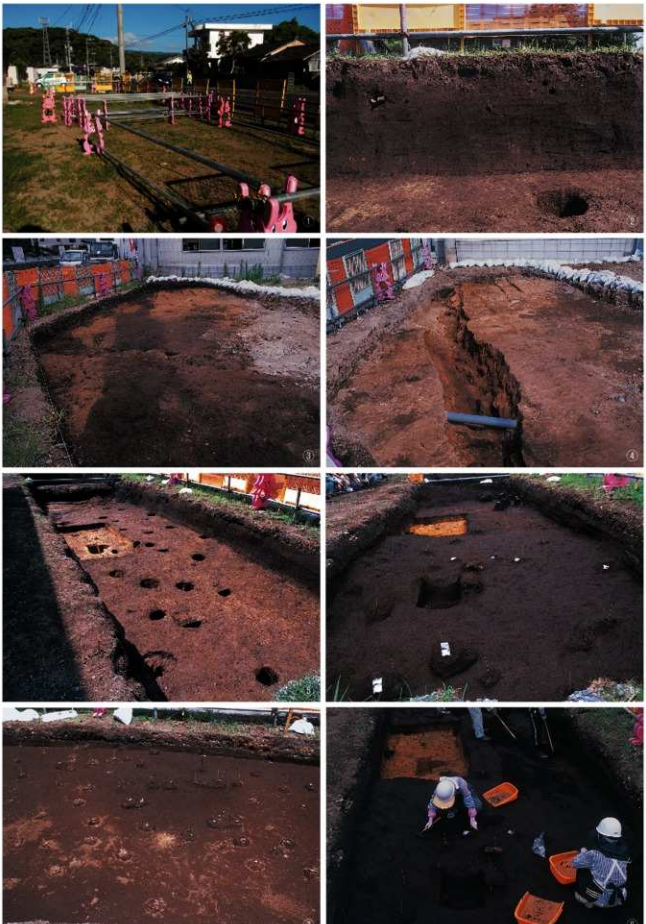
指宿市教育委員会（1982）「横瀬遺跡」指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書６

指宿市教育委員会（1986）「尾長谷迫遺跡」指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書７

指宿市教育委員会（2005）「中尾迫遺跡」指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書38

指宿市教育委員会（2012）「第１節　岩本籠遺跡」「平成24年度市内遺跡確認調査報告書（敷領遺跡・松尾城）」指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書52．pp.7-8．

写　真　図　版



①調査前風景　②土層断面　③溝状遺構検出状況　④溝状遺構完掘状況　⑤ピット群完掘状況　⑥・⑦遺物出土状況
⑧作業風景

図版2

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

縄文時代の土器

縄文時代の石器

図版4

弥生時代～中世の遺物

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（4）
国道226号岩本交差点改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

岩本麓遺跡

発　行　2015年３月

編　集　鹿児島教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL 0995-70-0574　FAX 0995-70-0576

印　刷　株式会社　トライ社
〒892-0834　鹿児島県鹿児島市南林寺町12－６
TEL 099-226-0815　FAX 099-225-7933

鹿児島県